

『歎異抄』現代語訳の方法と試訳

加藤 智見
基礎教育課程

A Way of Translating “Tannishou” into the Modern Japanese and its Tentative Translation

KATO Chiken

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 9, 2007 ; Accepted January 10, 2008)

1. 『歎異抄』現代語訳の方法について

本稿は、代表的な宗教文献の一『歎異抄』を取り上げ、宗教文献現代語訳の方法について考え、試訳を試みるものである。

『歎異抄』は、唯円（作者については唯円のほかに如信、覚如が著したのではないかという説があるが、ここではこの問題には触れないで、仮に唯円であったとしておく）によって親鸞没後ほぼ20年から30年後に書かれたものであるとされる。その構成は、序文と本文18章からなり、前半の9章は親鸞の語った言葉の収録、後半の9章は唯円自身の解釈について述べられている。そしてその末尾に後記、流罪記録、奥書が付されている。本書の意図は、序文に漢文で「竊廻愚案、粗勘古今、歎異先師口伝之真信」¹⁾と記されているように著作当時異端的な説が横行していたことを歎き、後記に「一室の行者のなかに信心異なることなからんために、なくなき筆をそめて」²⁾と記されているようにその異端的な信仰を指摘し、正しい信仰を訴えようとしたものである。したがって信仰心情の微妙な機微に触れた表現にみちている。それゆえ文学の世界からも、傑作の一つに数えられることが多い。

しかしこれは文学の深みというより、当然のことながら宗教性の深みから書き記されたものであり、まずもって宗教文献として宗教の場から問題にされるべきであろうし、これを現代語に翻訳する場合には、このことが十分に考えられねばならないだろう。

ところで翻訳といっても、その訳し方はさまざまである。文法と辞書によって比較的直訳に近い形で訳されても翻訳したことになる場合もあるであろうが、宗教的な文献の翻訳は容易ではない。論理の飛躍があったり、荒唐無稽に思える世界観の上に築かれ、それを信じるべしと一方的に投げかけられるというような文もあり、その

上、行間を読めとか結局は以心伝心でしか相手の胸にはとどかないと結論づけられる場合もある。さらには言葉に置き換えられない場合すらあるし、書き記されてから数百年、あるいは数千年もたち、現代人の意識構造、思考回路とはまったくちがった意識や思考によって書き著されている場合もあるため、現代語に置き換えてもまったく意味の通じないことも多い。

加えて宗教文献というものは、人の心や胸や腹の底に響かなければならないものである。自然科学のようにいわゆる正確に翻訳すればよいというものでもない。現代人の頭というよりは心や胸、腹の底に響き、共鳴するものでなくてはならないが、ではどんな翻訳法があるのだろうか。

唐突であるかも知れないが、真宗中興の祖といわれる蓮如の姿勢を見てみたい。彼は『御文』の中に次のように書いている。「末代無智ノ在家止住ノ男女タラントモカラハ、心ヲ一ニシテ阿弥陀仏ヲフカクタノミマイラセテ、サラニ余ノカタヘコ、ロヲフラス、一心一向ニ仏タスケタマヘト申サン衆生ヲハ、タトヒ罪業ハ深重ナリトモ、必ス弥陀如来ハスクヒマシマスヘシ。コレスナハチ第十八ノ念仏往生ノ誓願ノコ、ロナリ」³⁾。この中の「第十八ノ念仏往生ノ誓願」とは、『仏説無量寿経』の第十八願のこと。「コ、ロ」とは真意といった意味をもつ。それゆえ上の蓮如の書いた文は、第十八願すなわち「設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念。若不生者、不取正覺。唯除五逆、誹謗正法。」を当時の現代語に翻訳したと言えなくもない。もちろん現代の「翻訳」のイメージからすると、とても翻訳とはいえないだろう。しかし蓮如は、『無量寿経』の真意を、まず自分の心に据え、胸で問い、腹の中で咀嚼し、同時に十五世紀戦乱の人々の気持の在りようを見据えて、彼らの気持に響く言葉に置きかえようと努力した。経典や宗教文献の類をただ書き下し文にしたり直訳しても、学問の世界

では有効であるにしても、庶民の胸や心、気持ちに届かず、まして腹に座るものではない。さらには目の前の死におびえる戦乱の世の人々に希望と信念を持たせることにはならないし、実存的な安定感を与えることにもならないだろう。

その時、その時の「現代人」のために当該時代の言葉に「現代語訳」し、彼らの胸に訴える言葉と文章に置き換えることも、重要な翻訳の使命である、と私は考える。人々の信仰を引き起こすための原文は、どんな時代、いかなる環境にあっても、やはり信仰を引き起こす文に置き換えねばならないだろう。先ほどの蓮如の場合のように、原文と蓮如の訳がちがいきすぎるから翻訳とは言えないとするより、それも一つの翻訳の姿勢であると考え、見つめるべきではないだろうか。この点をまず、ここで問題提起しておきたいのである。

たとえば「十方の衆生」という言葉は、目の前の死におびえる戦乱の室町の庶民には抽象的すぎ、すばり「末代無智ノ在家止住ノ男女タラントモカラ」と言われるほうが胸に響く。さらに「至心信楽」という言葉は「心ヲ一ニシテ……タノミマイラセテ、一心一向ニ」と言われたほうが腹に座る。「若不生者、不取正覚。唯除五逆、誹謗正法」も「タトヒ罪業ハ深重ナリトモ、必ス弥陀如来ハスクヒマシマスヘシ」とすばり言い切られたほうが、庶民にはうれしい。正確な訳であっても、まるで人の心に響かないものも多い。翻訳者の宗教体験も、実は深くかわるのである。蓮如の言語感覚に体験が加わったことも『御文』の爆発的な流布の原因になったと考えられるのである。とにかく蓮如は仏の真意を問い続けつつ、庶民の声を聞き、彼らの心に仏の心がどのように響き、届くのかを常に問題にし続けた。本願寺の継職者というより、戦乱に血迷う一人の人間として生きていたがゆえに発し得た言葉が多い。

さらに蓮如の言葉には、「ステハテラレタルワレラコトキノ凡夫」⁴⁾、「末代ワレラコトキノ在家止住ノ身」⁵⁾、「アサマシキ我等凡夫」⁶⁾、「罪業ノワレラタランモノ」⁷⁾、「我等コトキノイタツラモノ」⁸⁾「ワレラコトキノ悪業煩惱ノ身」⁹⁾のような表現が多いが、常に庶民と同等の「ワレラ」の場に立っての表現なのである。単なる翻訳者の場に立って表現しているのではない。文献の中に、庶民の一人として、救いを聞き取りとうとする態度である。

次に親鸞を取り上げ、さらにこの問題について考えてみる。親鸞は漢訳『無量寿経』中の、いわゆる本願成就文「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念。至心廻向。願生彼国、即得往生、住不退転。……」(下線、筆者)の部分を次のような日本語にした。「あらゆる衆生、その名号をききて、信心歓喜せんこと乃至一念せん、至

心に廻向せしめたまへり。かのくににむまれんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退転に住せん、……」¹⁰⁾。漢文のオーソドックスな読み方からすれば、この下線部は衆生が廻向するというように読むべきであり、廻向の主体は衆生のほうにあるはずであるが、彼はその主体を阿弥陀仏に置いた。文法的な読み方を無視してまで阿弥陀仏の真意に迫ろうとしているのである。ここに親鸞の翻訳の特質が見られるが、このような読み方も一つの翻訳の方法であると考えられるのである。

信仰体験は、時として文法的なものを越えてその真理をとらえさせることがあると私は考えている。宗教改革の口火をきった M. ルターは、後に自身の回心について振り返り、次のように告白した。彼の回心は詩篇を読んでいるときにおこったとされるが、「昼も夜も考え続けた末に、神のあわれみにより、義人は信仰によって生きる、と書かれているように、神の義は(福音)の内に啓示されている、という言葉のつながりに気づいた。そのとき神の義は、義人が神の賜物である信仰によって(ex fide)生きるその神の賜物、信仰と同義である、と考え始めたのだ。そして神の義は福音によって啓示される、ということはこのように解されるべきであり、受動的であることを考えはじめたのである。すなわち義人は信仰によって生きる、と書かれているように、あわれみ深い神は信仰によって人をして義としたもうのである。このようにして私は、自分が徹底的に生まれ変わり、門が開かれ楽園の中に入ったと気づいたのだ」¹¹⁾と告白している。このようにしてルターは新しい信仰を見出したのである。聖書を読んだ人々は無数にいるが、ルターは「義」や「信仰」を自身の胸、心、腹の中で読み、気づき、このように翻訳したのである。

さて、以上のような点からも察せられるように、宗教的な文献は種々の翻訳法があると考えられるし、単に文法や辞書によってのみでは訳しきれないところがあると思えるのである。このため宗教文献を翻訳するには、このような事情を熟考することによって翻訳する必要があるだろう。また蓮如のところで指摘したように、同時代人、現代人の胸の内、言い換えれば彼らの心がいかなる状況にあるか、という配慮もされねばならない。文法的に正確であっても、無色透明な訳では懊悩する人々の胸には迫れないからである。

こうした観点から、本稿では『歎異抄』を、現代人の中に多い、たとえば宗教アレルギーのために宗教嫌いになっている人々、営利追求の場からのみ宗教を見、宗教を見誤っている人々に、唯円はどのように胸のうちを訴え、批判しているかという場からも取り上げ、現代語訳を試みる。

《凡例》1.『歎異抄』の底本として、大谷大学蔵端坊旧蔵永正本を用い、対校本として西本願寺蔵蓮如写本を用いる。2. 底本では、各章段が一つ書とされ、その右傍に小文字で番号がつけられている。この番号を生かして全体を十八章に分けることとしたい。第一章から第九章までは親鸞の言葉、第十章から第十八章までは唯円の歎異の言葉が収録されている。なお第十八章に「後記」に当たるもの、「流罪記録」「奥書」が続くが、本稿では紙数の関係上、この部分は割愛する。また注についても、一々難解な語の説明をするのではなく、解釈上微妙な問題をはらむ言葉のみを注釈したい。）

2. 『歎異抄』試訳

序文

ひそかに、おろかな考えをめぐらし、親鸞聖人ご在世のころと今とをくらべてみますと、今では聖人がみずからの口で教えてくださった正しい信心とは異なった信心が説かれていることを歎かざるをえません。これでは、将来聖人の教えを受け継いでいくうえで、さまざまな疑惑を生むことになるのではないかと心配になるのです。

さいわいにも縁あってよき師に出会う、ということがないとしたら、ただ阿弥陀さまを信じ念仏もうすだけでよいというやさしい易行の門に、どうして入ることができましょうか。自分勝手な理解によって、他力の教えを乱すようなことは絶対にしてはなりません。

そこで、今は亡き聖人が生前語ってくださったことのうちで、今でもしっかりと耳の底にとどまっている教えの一部を書きしるすことにします。ただただ共に念仏の教えに生きようとする人々の不審をなくすためなのです。

第一章

「私たちの理解をはるかにこえた¹²⁾、あらゆるものを救おうとなさってくださいる阿弥陀さまの力によって、浄土という新しい目ざめの世界に生まれさせていただけ¹³⁾と信じ、うれしさのあまり念仏もうそうという心がおこるとき、すでに私たちはしっかりと阿弥陀さまに抱き取られ、恵みの心をいただいているのです。

阿弥陀さまの願いの前では、老人と若者、善人と悪人などという人間の物差しではかった区別などは問題ではなくなってしまうのです。ただただ、このように願ってくださる阿弥陀さまを信じることだけがすべてになるのです。そのわけは、阿弥陀さまの願いは、罪をおかさずには生きてゆけず、煩惱が火のように燃え盛っている人々こそを救おうとしてくださる願いだからです。

ですから本願を信じようと決めたならば、もう善いことをしようなどと思う必要はありません。阿弥陀さまを慕って念仏もうすより善いことなどないからです。また

犯した悪を恐れる必要もありません。阿弥陀さまの願いをさまたげるほどの悪はないからです」と親鸞聖人はおっしゃいました。

第二章

「はるか遠い東国から、十余か国の境をこえてあなたたちが命がけでこの京都にまで私をたずねて来てくださったのは、ひとえに、新しい目ざめの世界である極楽浄土に生まれる道をたずねるためでしょう。しかしながら、お念仏以外にも浄土に生まれる道を私が知っており、その根拠となる書物なども知っているだろうと期待し、それを知りたいと思っておられるのなら、それは大きなあやまりというものです。

もしそうならば、奈良や比叡山にも立派な学僧がおおぜいおられますから、その方たちに会って浄土に生まれる理論的根拠を、納得できるまで聞かれるがよいでしょう。親鸞においては、『ただ念仏もうして阿弥陀さまに助けられ、浄土に生まれさせていただきなさい』とおっしゃってくださった法然聖人の仰せを信じて念仏もうすほかに、別の根拠はないのです。

お念仏は、本当に浄土に生まれる原因になるのか、地獄におちる行為となるのか、この私にはまったくわかりません。しかし、かりに法然聖人にだまされ、念仏して地獄におちることになって私も少しも後悔しません。なぜなら、念仏以外の行に励んで仏になれる身であったのに、念仏をもうしたために地獄におちってしまったというのなら、だまされたと後悔することもあるでしょうが、どんな行もとうてい不可能な身なのですから、地獄以外に行くところなどないからです。

阿弥陀さまの、あらゆるものを救うという本願がまことであれば、それを説かれたお釈迦さまの教えが嘘であるはずはありません。お釈迦さまの説かれた教えがまことであれば、お釈迦さまの真意を受け継いだ善導大師のご解釈に嘘はないはずです。善導大師のご解釈がまことであれば、善導大師のご解釈によって回心なさった法然聖人の教えにいつわりがあるはずはありません。法然聖人の仰せられた教えがまことならば、私親鸞が申すことも根拠のないことではないでしょう。

要するに、愚かな私の信心は以上のようなものです。このうへは、念仏を選んで信じなさろうと、お捨てになろうと、あなたたち自身が判断なさることです」と、聖人はおっしゃいました。

第三章

「善人でさえ浄土に生まれることができます。まして悪人が生まれられないはずはありません。

ところが世間の人は常に、『悪人でさえ浄土に生まれることができる。まして善人が生まれられないはずはな

い』と言います。たしかにこのような考え方は、一応筋が通っているようにもみえますが、阿弥陀さまの本願を信じる他力の趣旨にはそむくことになるのです。

というのは、自分の力に頼って善い行為をし、その功德によって浄土に生まれようとする人は、いちずに阿弥陀さまをたのむ心が欠けているから、救いの対象にはしていただけないのです。しかしこのような自力の心をひるがえし、ひたすら他力をたのみ切るとき、阿弥陀さまに目を開かれ、目ざめさせていただいて真実の浄土に生まれることができるのです。

どうあがいてみても煩惱から離れられない私たちは、どのような修行をしてみても、とうてい迷いの世界を離れる¹⁴⁾ことなどできません。こんな私たちをあわれんで本願をおこしてくださった阿弥陀さまの本心は、このような悪人を目ざめさせ、仏にしようとしてくださるところにあるのですから、いちずに他力をたのむ悪人こそがもっともふさわしい者となるのです。善人でさえ往生する、まして悪人が生まれないはずはないというのはそのためなのです」と聖人はおっしゃいました。

第四章

慈悲には、自力による聖道門と他力による浄土門で違いがあるのです。

聖道門という慈悲とは、すべての命あるものをあわれみ、いとおしみ、はぐくもうとすることです。しかし実際には、思い通りに助けてあげるなどということは、とても無理なことです。

これに対し浄土門という慈悲とは、念仏もうして浄土に生まれ、阿弥陀さまの力によってすみやかに仏にさせていただいたうえで、大慈悲心をもって、思いのままにすべてのものに救いの手を差しをけることを言うのです。

この世に生きている間は、どんなにいとおいしい、かわいそうだと思っても、自力によっては思い通りに助けることなどできませんから、この聖道門の慈悲は本当の慈悲となることはできないのです。ですから念仏もうすことだけが真実の大慈悲心となるのです」と聖人はおっしゃいました。

第五章

「私親鸞は、亡き父母に孝行するために追善供養の念仏をもうしたことは一度だってありません。

なぜなら、いのちあるものはすべて、はるか昔から何度も生まれかわったり死にかわったりする間に、私の父母であったり兄弟であったからです。ですからこの次に生まれるときは仏となって¹⁵⁾、いのちあるものすべてを助けなければならないのです。

お念仏が私の力で励む善行であるならば、その功德を亡き父母にふりむけて供養することもできるでしょうが、

お念仏は、自分の力ではげむものではありません。ですからひたすら自力の思いを捨て去って、すみやかに浄土に生まれさせていただき、さとりを開いたならば、父母や兄弟たちがたとえ地獄や餓鬼や畜生の世界などに生まれ、どんな苦しみに沈んでいても、さとりのもつ凡夫の理解をこえた力によって、まず自分にもっとも縁の深い人々から救うことができるようになるでしょう」と聖人はおっしゃいました。

第六章

「ただひたすら念仏もうす専修念仏の人々の間に、この人は私の弟子だ、あの人は他人の弟子だなどという弟子の奪い合いがあるようですが、もってのほかのことです。

私親鸞は、弟子は一人ももっておりません。そのわけは、私のはからいで人に念仏をもうさせるのであれば弟子であるとも言えるでしょうが、ひとえに阿弥陀さまの働きかけによって念仏もうさせていただく人々を、私の弟子であるなどということはとても言えることではないからです。

結びつくべき縁があれば結びつき、離れるべき縁があれば離れるのです。それなのに師にそむき、他人にしたがって念仏もうすならば浄土に生まれることはできない、などということは絶対に言うてはならないことです。阿弥陀さまからいただいた信心を、自分が与えたものだといって取り返そうとでも言うのでしょうか。そのようなことは決してあるべきことではないのです。

すべてを阿弥陀さまにおまかせし、生きさせていただいていれば、おのずと阿弥陀さまのご恩も自分を導いてくださった師のご恩もよくわかってくるようになるものです」と聖人はおっしゃいました。

第七章

「念仏もうす人は、何ものにもさまたげられないただ一すじの道を行く人なのです。

その理由を言えば、阿弥陀さまの願いを固く信じて念仏もうす人には、梵天など天の神々も龍王など地の神々も敬いひれ伏し、魔界に住む魔物たちや邪道にくみするものたちも、これをさまたげることはできないからです。

どんな罪惡の報いもおよばないし、自力の善を積んで得る功德も、とうていこの念仏の善にはおよびませんから、何ものにもさまたげられることのない一すじの道であると言えるのです」と聖人はおっしゃいました。

第八章

「念仏もうすことは、その人にとっては行でもなく善でもありません。

自分の力ではからって行なうものではないから、行ではないということです。また自分のはからいによって作る

善ではないから善ではないというのです。ひとえに他力によるものであり、自力とは無関係な行為ですから、念仏もうす人にとっては行でもなく、善でもないわけです」と聖人はおっしゃいました。

第九章

私唯円が、「念仏をもうしておりまして、おどりがるような喜びがわきおこってきません。また、早く目ざめさせていただき浄土へ生まれさせていただきたいという心もおこってきませんのは、どういうことなのでしょう」とおたずねしますと、聖人は「この親鸞も実は同じような疑問をもっていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ思いをもっていたのだなあ」とおっしゃり、次のように話してくださいました。

「よくよく考えてみれば、天におどり地におどるほどに喜ばなければならないことを喜ばないのですから、いよいよ浄土に生まれさせていただけることは確実にになったと思わなければなりません。喜ばなければならない心を抑えつけて喜ばせないのは、ほかでもなく煩惱のしわざなのです。阿弥陀さまはこのことをとくに知っておられ、煩惱からのがれられない愚かな凡夫たちよ、と呼びかけてくださっているのです。他力の悲願はまさにこのような私たちのためであると気づかせていただけるのですし、いよいよたのもしく思えるのです。

また、早く浄土へまいりたいという心もおこらず、ちょっと病気にかかったりすると死んでしまうのではないかと心細くなってしまうのも、煩惱のしわざなのです。遠い遠い過去から今まで、生まれかわり死にかわりして流転してきた苦悩の世界なのに、これを捨てられず、これから生まれさせていただく安らぎにみちた浄土を恋しいと思えないのは、よくよく煩惱がさかんだということです。

どんなに名残惜しく思っても、この世との縁が尽き、どうしてもなくなって命が終るときに、あの浄土に参らせていただければよいのです¹⁶⁾。急いで参らせていただきたいと思えない者こそを、特にあわれんでくださるのです。このようなわけですから、いよいよ、深い慈悲によっておこされた阿弥陀さまの願いはたのもしく、浄土に生まれさせていただくことはまちがいないと思いなさい。おどりがるほど喜ぶことができ、浄土に早く参りたいなどと思えるなら、かえって煩惱がなく救いの対象になっていないのでは、と疑ってしまうでしょう」と聖人はおっしゃいました。

第十章

「念仏は阿弥陀さまによってもうさせていただくのですから、人間のはからいがないことに真の意義があるのです。とうてい人間の言葉に表したり、説明したり、思いはかったりできるものではありません」と聖人はおっ

しゃいました。

さて、聖人ご在世のころ、同じころざしをもって東国からはるばる遠い京都まで歩みを運ばれた方々は、信心を同じくし、同じ浄土に生まれさせていただこうと願う同朋たち¹⁷⁾でした。こうして聖人から信心の核心をうけたまわった人々とともに念仏もうされる老若が限りなく多くなりましたが、その中に、最近聖人のおっしゃったことと異なったいろいろの考えを主張する人が多くなったと伝え聞いております。そこで私は、そのようないわれない異説の一つひとつについて、次にくわしく書きしるしておきます。

第十一章

文字も読めない無学な人が念仏もうすを見て、「おまえは、阿弥陀さまの誓願の不思議な力を信じて念仏もうしているのか、それとも阿弥陀さまの名号の不思議な力を信じて念仏もうしているのか」などと言って驚かせ、この私たちの理解をこえた阿弥陀さまの二つの働きかけについてしっかりと説明することもせず、人の心を迷わす者がおります。このことはよくよく心にとどめ、きちんと考えておかねばなりません。

阿弥陀さまは、私たちの理解をはるかにこえたありがたい誓願をたててください、だれでもおぼえることができ、いつでももうすことができる「南無阿弥陀仏」という名号を考え出してくださいました。そしてこの名号をもうす人すべてを浄土に迎えとろうと約束してくださいました。ですから、とにかく阿弥陀さまの深い慈悲にみたまされた不思議な力に助けていただき、迷いの世界をのがれることができると信じ、念仏もうすことすら阿弥陀さまからはからいなのだと思えば、少しも自分のはからいが入りませんから、阿弥陀さまの誓願のご意志に合うことになり、目ざめさせていただいて浄土に生まれることができるのです。阿弥陀さまの誓願の力をひたすら信じさせていただいていけば、名号の不思議な力もそこにそなわっていますから、誓願と名号の力の一つであって異なるものではないということがわかってくるのです。

次に、善・悪の二つについてですが、自分の判断で善い行ないは浄土に生まれる助けとなるもの・悪い行ないはそのさまたげとなるものであると区別して考えることは、善悪を区別せずに救いとってください阿弥陀さまの誓願の力を信頼していないことになるのです。自分の力によって浄土に生まれようともがくことであって、もうす念仏も自力の行にしてしまうのです。このような人は誓願を信じないばかりか、名号の不思議な力も信じていないのであります。

しかし信じていなくても、阿弥陀さまのおかげで、真の浄土ではないけれど、仮に信仰の薄い者の生まれる辺

鄙な浄土や、疑い深い者の生まれる暗い浄土に一旦生まれさせていただき、最後には、自力の念仏をもうす者であっても遂には真の浄土に生まれさせようとしてくださる第二十願すなわち果遂の願により、真実の浄土に生まれさせていただけるのは、やはり名号の力が働くからなのです。このようなことは、あくまで阿弥陀さまの誓願の力によるものですから、本来、誓願と名号はまったく一つのものであると考えるべきなのです。

第十二章

念仏をもうしていても、経典や注釈書を読んで学問をしない人は浄土に生まれることなどできない、という人がいますが、これはまったくもって取るに足りない理屈です。

他力の教えが真実であることを明らかにしていただきたさまざまな聖教には、本願を信じ念仏もうせば仏にさせていただけると説かれています。であれば、浄土に生まれるためにどんな学問が必要だというのでしょうか。本当にこの道理がわからないで迷っている人は、なんとか学問をして本願の趣旨を知るべきでしょう。しかし経典や注釈書を読んで学問をしても、それでも聖教の本当の意味が理解できないということは、まことにあわれむべきことであります。

文字も読めず経典や注釈書の内容を知らない人にでもとなえやすいようにと「南無阿弥陀仏」という名号が考え出されたのですから、易行というのです。学問が重要視されるのは聖道門といい、難行と名づけられています。まちがって学問をし、名譽欲や財欲にとらわれている人は次の世に浄土に生まれられるかどうかは疑わしい、という聖人の書かれた証拠の文もあります。

最近、専修念仏の人と聖道門の人が論争をくだで、自分の信じる教えこそがすぐれており、他人の信じる教えは劣っているなどと言っているうちに、いつしか仏法の敵まで現われ、仏法をそしりはじめました。このようなことは、結局は私たちの教えを、みずから破りそしることになってしまうのではないのでしょうか。

たとえ仏教の諸門がござって、念仏はとるにたりない者のためのものだ、教えも浅いし低級だ、と言ったにしても、決して争わず、私たちのようにつまらぬ凡夫、文字さえ読めない者でも、ただ信じれば救われると教えていただき、信じさせていただいておりますので、すぐれた人々にとってはいい教えだ思われても、私たちには最上の教えなのです。たとえこれ以外の教えがどんなにすぐれておりましようとも、私たちには能力がおよびませんので実践することはできません。私にとってもほかの人にとっても、迷いを離れさせてくださることこそが諸仏の本当のご意志であるのですから、どうぞ私が念

仏もうすことをさまたげられませんようにと言って、憎んでいるような態度をとらなければ、だれが妨害するでしょうか。さらには、「論争しようとするれば、さまざまな煩惱がおこる。分別のある者はこのような論争からは遠く離れなければならない」と書かれた証拠の文もあります。

今は亡き聖人は、「このような念仏の教えを信じる人々もあろうし、そしる人々もあろうとお釈迦さまも説いてくださっていたのですから、私は信じさせていただいているのです。また、そしる人があるからこそ、かえってお釈迦さまのお説きになったことが真実の教えであると気づかされるのです。ですから浄土に生まれることはいよいよたしかであるとお思いになってよいのです。もしそしる人がいなかったら、信じる人がいるのに、どうしてそしる人がいないのだろうか、かえって不審に思えてしまうでしょう。もちろんこのようにもうしたからといって、人にそしられることを望んでいるわけではありません。お釈迦さまは教えを説く際、あらかじめ信じる人もそしる人も共にいることを承知のうえで、そしられたからといってその教えを疑わないようにと説いてくださっていたのです」とおっしゃいました。

しかし最近の念仏者の中には、学問をすることによってそしりをやめさせようと、必死になって論議や問答をしようと身構えている人がいるようですが、これはおかしいのです。学問をしようとするなら、いよいよ阿弥陀如来の本当のご意志を知り、広大な悲願の意味を知らせていただき、自分のようにいやしい身ではとても浄土などには生まれられないのではないかと、心を痛めている人にも、本願は、善人であろうと悪人であろうと、心が浄らかであろうと穢れていようと、区別せず救いとしてくださるのですよ、と説き聞かせてあげることこそが学問をする人のつとめとなるでしょう。たまたま素直に本願が心に響いて念仏もうすようになった人にも、学問してこそ救われるのだなどと言っておどすのは、仏法をさまたげる悪魔であり、仏さまの怨敵となることです。そのような人はみずから他力を信じる心を欠くだけでなく、あやまって他人を迷わそうとする者になってしまうのです。

このように浄土に生まれるためには学問が必要だなどと言うことは、聖人のお心にそむくことになるのですから、つつしみ、おそれなければなりません。同時にそれはまた、阿弥陀さまの本願にもそむくことになるのですから、そのように言う人々をあわれまねばならないのです。

第十三章

阿弥陀さまの本願には、どんな悪人でも救いとしてくだ

さるという、私たちの理解をはるかにこえた力があるからといって、悪事を働くことを恐れないことは、本願を誇りあまえる¹⁸⁾「本願ばかり」といい、これもまた浄土に生まれることはできないということについて。このように言うのは、本願を疑い、この世界における善も悪もすべてが前世の行ないのむくいであるということがわかっていないからです。

善い心がおこるのも前世で行なった善い行ないがさせるのであり、悪いことを思ったり、したりするのも前世の悪い行為によるものなのです。今は亡き聖人も「人間の犯す、兎の毛や羊の毛の先についている塵のように小さな罪も、前世からの因縁によらないものはない」とおっしゃいました。

またあるとき、私に向かって「唯円房は、私の言うことを信じるか」とおっしゃいましたので、「もちろん信じます」ともうしあげました。「では私の言うことには逆らわないね」と重ねておっしゃいましたので、つつしんで承知いたしましたところ、「ではまず人を千人殺してもらおうか。そうすれば浄土に確実に生まれられるぞ」とおっしゃいました。そのとき「仰せではございますが、私のような人間には千人どころか一人の人間だって殺せるとは思えません」ともうしあげますと、「さてはどうした、親鸞の言うことには逆らわないと言ったではないか」とおっしゃいました。つづいて聖人は「これでわかったでしょう。どんなことも思い通りになるのなら、浄土に生まれるために千人殺せと私に言われたら、すぐにでも殺すことができるだろう。しかしながら一人の人間すら殺せないのは、殺すべき行為を引き起こす因となる過去の行為がないからだ。自分の心が善くて殺さないのではない。逆に殺すまいと思っても、因縁によって百人、千人を殺さざるをえないこともあるのです」とおっしゃいました。この仰せは、私たちが、自分の心が善ければ浄土に生まれるためによいことであり、自分の心が悪いのは浄土に生まれるためには悪いことだと自分勝手に思いこみ、私たちの理解をこえた本願の力によって救われるということに気づいていないということをおっしゃっているのです。

聖人がいらっしゃる頃、まちがった考えをもつ人がいて、悪を犯した者を助けようとするのが本願であるといってわざと悪事を働き、それを浄土に生まれる行為だと言っておりましたが、やがてうわさとなって聖人のお耳に入ると、聖人はお手紙に、「薬があるからといって毒を好んで飲むようなことはしてはいけません」と書かれました。そのようなまちがった考えにとらわれるのをやめさせようとされたからです。しかしこのことは、悪を犯すことが浄土に生まれる妨げになるということを書いてい

るのでは決してありません。聖人も「戒律を守り悪を犯さず善だけを行なう人、このような人だけが本願を信じることができるというのなら、私たちはどうして迷いの世界を離れることができるのか」とおっしゃっています。あさましい身であっても本願に出会わせていただいたからこそ、誇りをもってその恵みにあずかることができるのです。しかし、だからといって、あえて過去世からの因縁によらない悪事などを犯す必要もありません。

また、「海や川で網をひき、釣りをして生活する人も、野山で狩をし、鳥をつかまえて命をつなぐ人も、商売をしたり、田畑を耕して過ごす人もまったく同じなのです」「だれであっても過去の行為の結果としてそうしなければならないという縁がもよおせば、どんなこともするものです」と聖人はおっしゃいました。

しかし最近では、浄土に生まれさせていただくことを願う者のふりをして、善人だけが念仏もうすことができると言ったり、あるいは道場にはり紙をして「これこれのことをした者は道場に入るべからず」などと言う者がいますが、このような行為は、外に向かっては賢く善行にはげむふりをし、内心には嘘いつわりの心を抱いているということではないでしょうか。

阿弥陀さまの本願を誇りあまえてつくる罪も、過去の行為が因縁となってつくる罪なのです。ですから善いことも悪いことも過去の行為のむくいだと考え、それにとられることなくひたすら本願を頼りにすることこそが他力なのです。法然聖人のお弟子の聖覚法印の書かれた『唯信抄』にも「阿弥陀さまがどれほどの力をもっておられるかを知ったうえで、私のような罪深い者は救われないだろう、と言っているのか」とおっしゃっています。罪深い者は救われないなどということは、阿弥陀さまの救いの力がわかっていないことなのです。阿弥陀さまの本願に誇りあまえる心があるからこそ、はじめて他力をたのむ信心も定まるというものです。

およそ自分の悪業や煩惱を滅ぼしつつして本願を信じるといのであれば、本願を誇りあまえる思いもなくてよいでしょう。しかし煩惱を滅ぼしつつすということとは仏になるということであり、このように仏になった者には、もはや長い長い間考えぬかれてたてられた本願は意味のないものになってしまうでしょう。本願を誇りあまえて悪いことをしてはならないといましめる人々も、煩惱や不浄を身につけておられるようです。そのようなことこそが、願に誇りあまえていることではないでしょうか。すると一体どのような悪を本願ばかりとし、どのような悪を本願ばかりではないとするのでしょうか。本願ばかりをよくないとするとは、かえって幼稚な考えではないでしょうか。

第十四章

たった一度念仏をとこなただけで八十億劫という長い間迷いの世界で苦しまねばならない重罪が消えてしまう、と信じなさいという念仏滅罪の異義について。

この異義は、十悪や五逆を犯す罪人が、日頃は念仏をとこななくても、臨終のとき、はじめて高僧に導かれ一度念仏をとこなれば、八十億劫の罪が消え、十度となれば十倍の八百億劫の重罪が消えてしまい浄土に生まれることができる、というものです。十悪や五逆がどんなに重罪なのかを自覚させるために一念・十念などと言っているのでしょうか。しかしこのような見方は、念仏には罪を消す働きがあるという「念仏滅罪の利益」の見方であって、私たちが信じている他力の信仰には遠くおよびません。

というのは、私たちの信仰は、阿弥陀さまの光に照らされ本願を信じさせていただこうという心がおこると同時にダイヤモンドのような固い信心をいただいてしまうのですから、すでに浄土に生まれさせていただくことが定まった人々の仲間に入れていただく¹⁹⁾のです。ですから命つきたとき、私たちがこの世界で作ったもろもろの煩惱や罪惡の障りを転じて仏にさせていただくことができるのです。もしも阿弥陀さまのこの悲願がなければ、私たちのようなあさましい罪人はどうして迷いの世界から離れることができるのだろうかと思い、一生の間もうす念仏はすべて阿弥陀さまの深い慈悲の恩にむくいる念仏、その徳に感謝する念仏であると思わねばならないのです。

念仏もうすたびに罪を消すことができると信じることは、すでに自分の力で罪を消して浄土に生まれようとはげむ自力にほかなりません。もしそうならば、一生の間に思うことはすべて迷いの世界に縛りつけるものばかりですから、臨終に至るまでたえずおこたりにく念仏をとこなえつづけて浄土に生まれようとしなければなりません。とはいっても、私たちは過去の行為のむくいのために自分の思いどおりには生きられないのですから、どんな思いがけないことにあい、また病気の苦しみにせめられて、死にのぞんで心乱され本願を喜ぶことなく死んでいかねばならないかも知れません。そんな場合、念仏をとこなえることはむずかしくなってしまうのです。念仏をとこなられない間の罪はどうして消せばよいのでしょうか。罪が消えないから、浄土に生まれることはできないというのでしょうか。

これに対し、すべてのものを救いにとって捨てないという阿弥陀さまの本願を信じ、自分を仏さまにゆだねていれば、どんなに思いがけないことがおこって罪を犯し念仏をもうせないで死ぬことになっても、すみやかに浄土に生まれさせていただけるのです。また臨終に念仏もう

すことができたにせよ、その念仏は、浄土に生まれてさとりを開かせていただくその時が近づくにしたがい、いよいよ阿弥陀さまに身をゆだね、そのご恩にむくいるための感謝の念仏なのです。

罪を消そうと思って念仏をとこなるのは自力の心であり、臨終に際して心を乱さずに念仏をとこなられるよう祈る人の本意ですから、すべてを阿弥陀さまにゆだねる他力の信心とはちがうのです。

第十五章

煩惱を持つ身でありながら、この世でさとりを開くことができるということ。このような考えはとんでもない間違いです。

この身のままで仏に成るという即身成仏は、真言密教の本意であり、身・口・意を働かせ、種々の行を積んで煩惱を滅ぼした結果に得られるさとりの成果です。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を清浄にする六根清浄は、『法華経』で説かれる唯一無二の所説で、身と口と心を清浄にし命あるものすべてをさとりに導く願いをおこすという四安樂の行を達成した結果として身に感じ取る功德です。これらはみな、実践するのがむずかしい行なので、すぐれた人たちがだけ精神を集中し行に徹することによって得られるさとりです。

これに対して、来世で浄土に生まれさせていただき、阿弥陀さまの力でさとりを開かせていただくというのが他力浄土門の根本的な教えです。これは他力の信心が定まってはじめて得られる道なのです。この教えは、易しい行であり、能力のない者でも行なうことができ、善人も悪人もわけへだてなく救われる教えなのです。

およそ、この世で煩惱や悪障を断ち切ってしまうようなことなど到底できませんので、真言や法華の教えによって修行なさっている聖僧といわれる方々も、来世に浄土に生まれてさとりを開きたいと祈っておられるのです。まして戒律を守れず、さとりを開く智恵もない私たちが、この世でさとりを開くことなどできるはずがありません。しかし、こんな私たちなのですが、阿弥陀さまの本願という船に乗せていただき、この苦しい迷いの海を渡らせてもらって浄土の岸に着かせていただければ、煩惱の黒い雲はあつというまに晴れ上がるのです。そしてさとりがたちまちにあらわれ、さまたげられることなく全世界を照らす光と一体になって、すべての人々に恵みをもたらすことでしょ。そのときにこそさとりを開かせていただくのです。この身このままこの現世でさとりを開くとおっしゃる方は、お釈迦さまのようにいろいろな人々を救うため、さまざまな姿に身を変えてこの世にあらわれ、仏の身にそなわる三十二の特徴や、さらに細かい八十の特徴をそなえて説法をなさったり恵みをもたら

すことがおできになるというのでしょうか。おできになれば、現世でさとりを開くお手本になるのでしょうか。

聖人のお作りなつた『高僧和讃』に、「ダイヤモンドのように堅固な信心が定まったそのときにこそ、阿弥陀さまの慈悲の光に攝取され、護られ、永遠に迷いの世界から遠ざかるのです」とあるように、信心が定まるとき、阿弥陀さまは救いとして決してお捨てになりませんから、もはや六道に輪廻するようなこともなくなるのです。ですから永遠に迷いの世界から遠ざかせてくださるのです。しかしこの教えをこの世でさとることと混同することは、まちがいであり、まことに歎かわしいことだといわねばなりません。「浄土の真の教えにおいては、この世で本願を信じ、浄土に生まれてさとりを開かせていただくのだ、と法然上人に教わりました」と亡き聖人はおっしゃっていました。

第十六章

本願を信じ念仏もうす人が、たまたま腹を立てたり悪いことをした場合、また同じ念仏をもうす仲間と口論したりした場合、そのたびに必ず悔い改めて回心しなければならないといわれることについて。このことは悪事を断ち善事をなすべしという自力にあたるのでしょうか。

ひたむきに阿弥陀さまの願いを信じ、ただただ念仏もうす人においては回心ということは一回しかありません。この回心というのは、日ごろは本願他力の教えの根本的な意味を知らない人が、阿弥陀さまの智慧をいただき、ふだんの心ではとても浄土には生まれられないと気づいて、それまでの心をひるがえし、本願を心から頼むようになること、このことをいうのです。

もし、すべてのことについて、朝に夕に回心してはじめて浄土に生まれることができるのであれば、人のいのちなどは吐いた息が吸い込まれるまでに終わってしまうようなものですから、回心する時間もなく、安らかで落ち着いた心になる前にいのちが終わってしまうかも知れません。だとすれば、阿弥陀さまの攝取不捨の誓いは空しいものになってしまうのではないのでしょうか。

そのつど回心せよという人は、口では阿弥陀さまの本願の力をお頼みすると言いながら、内心では、悪人を救おうとする願が人の理解をこえたどんなにありがたいものだといってもやはり善人だけを救おうとなさっているのだ、と思っているのです。ですから本願の力を疑ってしまい、他力を頼む心に欠け、本当の浄土には生まれられず仮の浄土にしか生まれられないということになるのです。最も歎かわしいことだと思いにあらねばなりません。

信心が定まったならば、目ざめて浄土に生まれさせていただくのは阿弥陀さまにさせていただくことですから、

自分ではからうことではなくなります。ですからたとえ自分が悪いことをしても、ますます阿弥陀さまの願いの力を仰ぎ信じさせていただくならば、自分のはからいの入らない他力の道理によって、おのずから安らかで苦勞に耐えられる心も生まれてくるのです。すべてどんなことにも、浄土に生まれさせていただくためには、こざかしい思いを捨てて、ただほれほれと²⁰⁾阿弥陀さまのご恩の深く重いことを常に思い出させていただくのです。そうすれば、念仏もおのずからもうすことができるようになります。これが自然^{じねん}ということなのです。自分のはからいを加えないことを自然といい、これがすなわち他力ということなのです。ところが自然ということ了他力とは別にあるようにもの知り顔にいう人がいると聞きますが、歎かわしいことです。

第十七章

仮の浄土である辺地に生まれる人は、ついには地獄におちるということ。このようなことを言わせる証拠がどんな經典に出ていたのでしょうか。学者ぶる人たちの中で言い出されているとのこと、本当に歎かわしいことです。經典や注釈書などの聖教をどのように理解しておられるのでしょうか。信心を欠いている念仏者は、本願を疑うことによって仮の浄土の辺地に生まれるのですが、疑った罪を償ってからは、真の浄土に生まれさせていただき、さとりを開かせていただくのだとお聞きしております。

信心をたまわっている真の念仏者が少ないため、とりあえず一人でも多く仮の浄土に生まれさせようとなさっているのに、その多くの人たちは結局空しく地獄へおちてしまいうなどということは、阿弥陀さまに嘘をつかせているということになるのです。

第十八章

仏事のために寄進するものの多少によって、浄土で大きな仏になったり小さな仏になったりと言われること。こんなことはとんでもないことであり、決して言うべきことではありません。まったく道理に合わないことなのです。

まず第一に、仏さまの体に大小の区別をつけようとするなどあり得ないことでしょう。たしかに經典には、安養浄土の教主阿弥陀さまのお体の大きさははかり知れないほど大きいとは説かれていますが、このお姿は人々に具体的にわからせるために方便として仮に現われてくださった報身の姿を言い表したものにすぎません。さとりを開かれ真理そのものに帰られ²¹⁾た仏さまの姿は、長短や方円の形もなく、青・黄・赤・白・黒などの色からも離れてしまっておられるのに、何をもって大きな仏、小さな仏などと定めることができるのでしょうか。念仏

をもうしますと、仮に姿を変えてくださった仏さまを見させていただけるといわれています。『大集経』には「大きな声で念仏もうすと大きな仏を、小さな声でもうすと小さな仏を見る」と書かれています、もしかするとこのような説にこじつけて言われているのでしょうか。

あるいは寄進をすることは、聖道門でいう檀波羅蜜の行であると言ってもいいでしょうが、どんなに財宝を仏前にそなえ、師に施しても、信心を欠いていれば何の意味もないのです。一枚の紙やわずかな銭すら寄進できなくても、他力に心をゆだね、信心が深ければ、それこそ阿弥陀さまの願いにかなうというものです。こうした間違いは、結局は仏法にかこつけて俗世の欲望をみたそうとすることであり、念仏もうす同朋をおどしておられることになるのではないのでしょうか。

註

- 1) 『歎異抄』（『真宗聖典』所収、東本願寺出版部、1978）626頁。
- 2) 同上、641頁。
- 3) 『御文』（『真宗史料集成』第二巻、同朋舎、1983）298頁。
- 4) 同上、189頁。
- 5) 同上、184頁。
- 6) 同上、198頁。
- 7) 同上、264頁。
- 8) 同上、147頁。
- 9) 同上、300頁。
- 10) 『教行信証』（『親鸞著作全集』、法蔵館、1964）123頁。
- 11) Vorrede zum ersten Bande der Gesamtausgaben seiner lateinischen Schriften, WA. 54, S. 186.
- 12) 下線部の原文は「^{みだ}「^{ぜいじんふしき}弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」の「不思議に」に当たる。この「不思議」を現代語の「不思議」と置き換えるだけでは現代人にその意味は伝わらないであろう。この誓願は阿弥陀仏（さらには釈尊）の、迷いから解脱した透徹した洞察力から生まれるものであって、煩惱にまみれた凡夫の理解をこえたものであるととらえたほうがよい、と私は考える。単に現代語の「不思議」という言葉に置き換えるだけでは、原因不明・説明がつかない・奇妙な、などの意味に誤解される恐れがある。説明がつかない不思議なことではなく、迷う凡夫には理解をこえたことであるということであるからである。しかしこれではまだ不十分な訳である。今後さらに適切な訳を考えねばならない。
- 13) 下線部の原文は「往生をばとぐる」に当たる。往生とは、古くはこの世を離れて別の世界に生じることであったが、浄土教が盛んになると阿弥陀仏の西方極楽浄土に生まれることを指すようになった。しかし親鸞はこの極楽浄土という言葉避けているところがある。絵画的、音楽的な極楽世界を方便化身土と呼び、真実の浄土（真仏土）に至るための方便として説かれていると考えた。彼によれば、真仏土すなわち真実の浄土は無量の光明に満ち、智慧に満ちた境地であり、無為涅槃の世界、寂滅の境地である。光明は智慧のかたちであるから真実に目覚めさせていただく浄土ということになる。阿弥陀仏の本願を信じ、その真実を気づかせてもらい、目ざめさせていただく世界が真仏土の世界であると考えべきであろう。その境地に至ることが往生であるから、ここではこのように訳しておいた。
- 14) 下線部の原文は「生死をはなるる」に当たるが、この生死は

現代語の「生死^{せいじ}」とはまったく異なった意味であり、この「生死をはなるる」ということは、業因によって六道に生まれかわり死にかわりすることから解放されることであり、生まれなくなる、死なくなるという意味ではない。生死に執着したり迷わされることがなくなるという意味である。生も死もなくなるという奇跡のようなことをいうのではない。仏教においては奇跡^{じき}というものは認められていないからである。

- 15) 原文は「^{じゆんじしやう}順次生に仏になりて」。次に生まれるときは、本願の力によって浄土に生まれさせていただき、仏にさせていただくというのである。なぜならこの浄土は特定の空間的な場所ではなく、真実に目ざめ、あらゆるものが浄らに見え、真理を真理として見ることができるといえる境地であるからである。それゆえに仏になり得るのである。
- 16) 原文は「ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり」。弥陀を信じ、念仏もうすとき、すでに浄土に生まれさせられているのであるが、煩惱にまどわれ、その浄土が浄土として気づけないのである。しかしそれでよい、肉体的な死を契機に浄土を気づけるようにしていただければそれでよい、という境地を指すと考えるべきであろう。
- 17) 原文は「信をひとつにして心を当来^{とうらい}の報土にかけしともがら」。「当来」とは将来の意味であり、将来同じ報土（浄土）に生まれるという意味でもあるが、親鸞の場合は単に将来浄土に生まれるということではなく、信仰のさだまったとき、そのまま浄土に生まれさせていただくのである。ただ煩惱のためその境地が実感できない。そこで今浄土にすまわせていただいているが、それを実感できない、しかし将来は必ずそれに気づき、浄土に生まれさせていただくという、いわば二重構造的な意識を認識しつつ読まねばならない文である。このためあえて「将来」という訳語はつけなかった。
- 18) この訳語に当たる原文はないが、「本願ほこり」という言葉は、本願が地獄におちるような人間をもすべて救いの対象とするということをよいことにして、悪行をしてもかまわない、さらには悪をなしたほうが救われるなどと曲解し、甘え、思ひ上がり、つけあがる気持ちに根ざしていると考えられることから、このような訳文を入れておいた。
- 19) 原文は「^{じやうじゆ}定聚のくらくにおさめしめたまひ」に当たり、浄土に生まれることが決まった人々の仲間に入れてもらうことである。親鸞によれば、死んでから浄土に生まれるのではない。本当は信心をいただいた時点で浄土に住むのである。しかし煩惱に目をふさがれて浄土に住んでいるとは思えないから、いずれ皆共に死を契機に浄土に生まれさせていただくというのである。その仲間を正定聚という。このような論理を見逃すと偏狭な理解と訳になる。
- 20) 原文も「ほればれと」。「ほればれと」とは一般には、何かに心を奪われ、うっとりする様子をあらわす言葉であるが、この場合はそうではない。あえていえば「仏さまの願いの深さに心を打たれ、ただ感謝の思いと喜びに満たされ、おのれを忘れて」とも表現すべき意味であろうが、それでも十分に意味を汲んだとはいえない。宗教的極地を表現した言葉であり、どうしても的確な現代語には表現し得ないので、とりあえず原文の言葉^{ことば}をそのまま使用しておく。
- 21) 原文は「法性のさとりをひらいて」であり、真実のさとりを開いてといった意味であるが、親鸞は『一念多念文意』で「この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまひて、無礙のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆへに、報身如来とまふすなり」と述べている。もともと阿弥陀仏は真理そのものであり姿かたちをもつ存在ではなかったが、人によく真理をわからせようと報身の姿をとってくださったと考えた。したがって人にその姿を示し、わからせたのちには再び真理そのものに帰っていく存在である。このため「真理そのものに帰られ」たと訳しておく。